

# 専攻科養護教諭専攻課程における 特別臨床実習についての一考察

太田 静江

帝京短期大学生生活科学科

A Study of the special clinical training in Department of “yogo”teacher majors

Shizue Ota

Department of Living Science ,Teikyou Junior College

## Abstract

To know it was necessary to plan What kind of training by an advanced course special clinical training to become a bearer of school nursing ,a training record of 7 present advanced course students was analyzed.

When the thing separated this training makes daily target last even for a short period ,and he's asking whether I could have the feeling of achievement ,the student person himself behaves, too, to learn to become a target. A hospital leader often devises it in setting in a place ,too, so the training contents are spread it in setting in a place, too, so the training contents are spread and learning becomes deep. It was training meeting and was to explain special education teacher's work ,and the angle of the health-care room showed that you're doing laboratory work.

It's tied with a confidence to first and disposal to do the work study by which nursing technology was used by a training. There are basic nursing which can be used at a health-care mom at a university and necessity which deepens teaching by practicing of first aid disposal.

**Keywords :** Advanced course, Special Clinical Training, Yougo teacher

## 要 旨

学校看護の担い手となるためには、専攻科特別臨床実習で、どのような実習を企画することが必要かを知るため、現専攻科学生7名の実習記録を分析した。

今回の実習で分かったことは、短期間であっても、毎日の目標を持たせ、達成感を持ってたか否かを聞いていくと、学生本人も、目標となることを学ぶべく行動し、病院指導者も場の設定に工夫してくれることもあり、実習内容が広がり、学びが深くなること。また、実習打ち合わせで、養護教諭の仕事の説明をすることで、保健室の視点で実習指導をしてくれていることが分かった。

実習で看護技術を駆使した体験実習をすることは、救急処置への自信につながる。

大学での保健室で使える基礎看護・救急処置の実践指導を深める必要性がある。

**キーワード：**専攻科、特別臨床実習、養護教諭

## I はじめに

専攻科養護教諭専攻における臨床実習については、2種免許取得時に臨床実習を体験しているが、1種免許取得のための特別臨床実習はいかにあるべきか。ま

た、免許取得上必須の実習であるが、どのような学びを必要としているのか。看護必要単位は10単位で、内容については、文部科学省のカリキュラムにはなく、各大学の裁量に任されている。<sup>1) 2)</sup> 本大学の専攻科での養護教諭の養成は3年目に入ったばかりであ

る。今回、2回生の専攻科での臨床実習の対応に当たったが、臨床医学・看護のみにとどまらず、広い医療（公衆衛生）の在り方や、学校保健室における児童生徒の問題の多様化等、養護教諭の専門性の拡大発展の考え方からも、精神保健問題・発達障害の問題も実践的に学べるよう配慮した。（地域精神保健福祉センター・軽度発達障害者支援センター等の実習）

このことから医療・看護の実習の内容が、必要十分なものになっているか？（期待される看護の知識・技術を十分に学べたか）病児とのかかわり方は学べたか？連携先としての医療現場の理解はできたのか？等、検証してみる必要性を感じ、実習内容の分析を試みた。

## II 専攻科特別臨床実習の概要

通常、専攻科一年後期に実施していたが、本年度は受け入れ病院の関係もあって、二年度夏休み中の5日間40時間の実習となった。

授業の概要は、<sup>3)</sup>

事前指導：実習にあたって、必要な知識や技術、実習への心構えについて確認する。

実習中：本科2種免許取得のための実習を踏まえた上で、さらに必要とされる、

①疾病や看護について基礎的な知識や技術を身につける

②見学・観察型実習のみでなく、専攻科であることから、できるだけ多く参加体験型実習を行う

③目的意識を持った実習にするため、実習そのものの目標は勿論、毎日の実習目標を明記させ、達成状況を明らかにさせる

④患者様の立場に立って、苦痛や不安を除去し安心感を与えるにはどのようなことが大切かを学ぶ

⑤学校と病院と地域の連携について実践的に学ぶ

事後指導：クラス全体で報告会を行い、学びを共有し、実習を振り返り学んだこと、課題として明らかになったことを整理する。

## III 目的について

専攻科養護教諭専攻の看護臨床実習を行った2年生7名の特別臨床実習日誌の各記述を調査分析し、どのような実習を体験しているのか。また、その実習は、学校看護を担う養護教諭の役割<sup>4)</sup>を果たしていくために十分であるのか。今後の課題は何か等について明らかにする。

## IV 研究方法

専攻科2年生7名を対象に、実習終了後、提出された実習日誌を使用した。

内容は、実習全体の目標・毎日の実習目標と達成状況・体験実習や見学実習の状況・体験した病名・実習を通しての学び（感想）・カンファレンスの記録・自己評価表について調査分析を試みた。

また、事前指導、事後指導、報告会の資料より検討を加えた。

学生7名には、研究の趣旨を伝え、各自の実習日誌の内容検討の許可を得た。

## V 結果

1) 特別臨床実習の目標 表-1 図-1

特別臨床実習要綱の授業概要<sup>3)</sup>から①～④に分類した。①基礎的な看護技術を身に付け、救急看護能力を高めることを目標としたもの-9件 ②学校・病院・地域等の連携について実践的に学ぶ-1件 ③患者の立場に立って苦痛や不安を取り除き安心感を与えるにはどのようなことが大切か-5件 ④その他-2件で、

・けがや病気などについて、保護者への説明の仕方  
・病院で受診する前に、学校で行っておくとよいことは何かであった。

2) 毎日の実習目標と達成状況 表-2

表-2では実習期間中の毎日の実習目標と目標達成ができたか否かの記録を分析した。

内容については、1)と同様の分類を行ったところ、目標では、

①基礎的な看護知識と技術を身に付け、救急看護能力を高めるもの-12件

②学校・病院・地域等の連携について-2件

③患者の立場に立って苦痛や不安を取り除き安心感を与えるにはどのようにしたらよいか-9件

④その他-8件 その内容は

・養護教諭と看護師の違いを患者対応中心に観察する  
・小児病棟特有の配慮や取り組みを学ぶ  
・看護師さんの一日の流れをみる

等

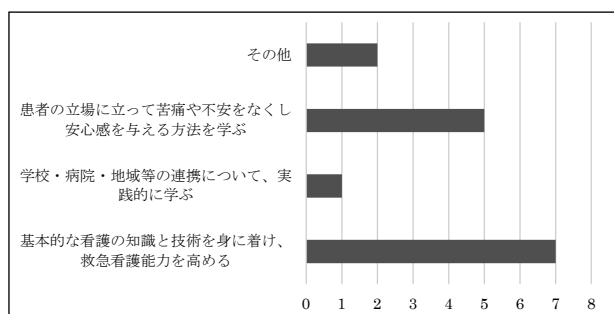
3) 実習で体験した事項

補助・体験事項 表-3

38項目に及ぶ看護技術の体験をしていた。（延べ件数は不明-日誌に記載のある項目のみで再掲しなかつ

表－1 特別臨床実習の目標

- ① 小児病棟では病児の苦痛や不安等を取り除くために、どのような気遣いが行われているか。
- ② 小児に対する生活のサポートにはどんな工夫がされているか。
- ③ 問診に注目して看護師・保護者・こどもの関わり方に学ぶ。
- ④ 病院内での徹底した感染予防法を学ぶ
- ⑤ 本科では、救急処置に生かせる学びがあった。今回は、ケガなどの子供と保護者への説明の仕方を学ぶ。
- ⑥ 看護師さんが、子供の訴えに対して、どのように対応し、配慮すべき点、訴えを聞き取る姿勢を吸収したい。
- ⑦ 食物アレルギーの児童に直接接し、実情を学びたい。
- ⑧ 整形外科病棟、骨折・打撲・捻挫では、どのような配慮が必要かまなびたい。
- ⑨ 大きなケガに遭遇したことがないので、冷静に対応できるよう、整形外科病棟で、学校でよく起こる骨折・打撲・捻挫について学びたい。
- ⑩ 外来と違い入院による生活習慣の違い、心身の反応などを見ていきたい。
- ⑪ ケガの場合、病院で受診する前に学校で行っておくといふことを教えてもらう。
- ⑫ 小児病棟では、病児の年齢に応じた対応をどのようにしているか細かく観察したい。
- ⑬ 児童の学校との連携はどのように行われているのかを知る。
- ⑭ 子供たちと積極的にかかわりたい。
- ⑮ 病児のおかれている状況を知る。



図－1 特別臨床実習の目標の内容

た) また、苦痛や不安の緩和を行い、安心感を与える工夫について5項目が記載されていた。

#### 見学事項 表－4

実習中の見学事項についてみると、看護技術については29件、連携については3件、患者・患児の関わりからの苦痛軽減については3件であった。

#### 実習で体験した病名 表－5

22の疾患の記載があり、のべ45名が体験していた。

#### 4) 実習を通しての感想 表－6

それぞれの実習体験から、達成感を述べたものが多かったが、否定的な記述も2件あった。

- ・回診はついてはいるだけになりがちで、処置はあまり良く見られなかった。
- ・大学で学んだ各種検査の実際は学べなかった。

#### 5) カンファレンスの内容 表－7

実習最終日に、病院看護師指導者、大学教員を交えて、実習体験から、検討したいテーマを決めてのカンファレンスを行っている。テーマは学生が設定し、活発に発言していた。テーマは3点であった。

- 小児病棟から学んだ学校感染症予防の在り方
- バイタルサインの測定を通した子供とのかかわり方
- 苦痛や不安を緩和するための工夫として、病院実習で体験したことを、学校保健室でどのように生かしていくかの視点で話し合っている。

#### 6) 自己評価について 図－2

実習に対する達成度(図－2)で見ると、病院職員や、病院を訪れるすべての人に誠実に対応することができたが34点で一番高く、病気やけがについての対

表-2 毎日の実習目標と達成状況

	今日の学び目標	目標達成状況
A	病棟の環境や状況を知る	病棟の一日の流れが解った 徹底した感染症予防のための病棟対策を学ぶ
A	看護師と子ども保護者との かかわり方を観察する	母親が来院できなくて泣いている病児への不安の軽減の ためこまめに病室に行き不安の軽減の仕方を学ぶ
A	患児にどのような生活補助 が行われているか	自分でできるものは自分でさせ自立させていた 生活補助は相談し、意志を尊重していた
A	病児の苦痛や不安の緩和は どのように行われているか	オペ送り出し、注射、迎え、バイタル測定等一連の流れ の中で学ぶ
A	患児に苦痛を与えないバイ タルサインの測り方	バイタルを 30 分ごとに測定しなければならない病児に 対応。なるべく短く、意識を他に向けて測定。
B	一日の病棟の流れや、病児 の情報を把握する	看護師がどのような行動をしているかを知ることが出来 た、担当児童のスケジュールを元に優先順位を考えてい た。看護師一人で判断せず担当医師、薬剤師と相談して いた。
B	子どもの様子を見に行く 時、何を確認しているのか	体調、顔色の観察、問題があるとカンファレンス時に提 案していた。
B	ベッドメイキングの配慮	ベッドの周りの私物を整えてから実施。 大学で学んだやり方で許可された。
B ▲	子どもの疾患とバイタルサ インの測定	バイタル測定はできたが、病気との関係は解らなかった。
B	患児の状態から、精神状態 をどう把握するか	プレイルームで一緒に遊んだり、ヨーヨーを創ったりす る中で子供の性格や気持ちを見ることができた。
C	小児科病棟の特有の配慮や 取り組みを学ぶ	ベッドの大きさ、柵に高さ等年齢によって工夫されてい た。食事は一口で食べられるように細かく、好みにも配 慮があった。
C ▲	積極的に病児と関わり子供 の訴えや背景を感じ取る。	自分の意志を言葉で伝えられない子供と関わったが、泣 いてばかりで、わからないことばかりでした。
C	整形外科病棟の状況把握	病院生活の中で、日常生活行動に様々な困難があること。 特に四肢、腰部の不自由が多い、病名は不明。
C	看護師と医師の連携を知る	手術後の回診でガーゼ交換で、阿吽の呼吸で処置される のを見学。傷の状態と処置の仕方を学ぶ。
C	患者さんに対する不安緩和 のための工夫を学ぶ	毎日の継続的な、患者一人一人の声掛けによる信頼関係 を築いていた。

D	どのような疾病の子供があるかを知る。	RSウイルス、川崎病、中耳炎の手術後。乳児から高校生まで多様であった。
D	具体的な対応を知る。 入院から退院まで。	外来での最終診察。医師からの説明、経過観察のための診察予約、病棟看護師から保護者への説明等一連を知ることが出来た。
D ▲	整形外科病棟でのけがの状況と処置を観察する。	大まかな一日の流れは把握したが、細かい作業がありすぎて難しかった。術後の傷の観察をたくさんすることが出来た。ガーゼ交換の方法は学校における救急処置の対応に役立てたい。
D	養護教諭と看護師の違いを患者対応を中心に観察する、	患者に寄り添い、“一緒にがんばりましょう”の印象があった、無理のない生活を中心にできるだけ自分でできることは自分でするように指導していた。 病院は短期の目標であるが、教育は生涯を通した教育目標であることに違いを感じた、
D	養護教諭として生かせることは何か、注意深く観察する。	病院ではクッションで痛み緩和や姿勢の確保のためいろいろな形のものがあった。保健室ではぬいぐるみなどで居心地をよくしているが、痛みの緩和の為にクッションも活用したい。
E	病棟入院患者の情報を知る	担当する脳症とネフローゼの子供の情報を細かく知ることが出来た。
E	患児の観察、対応の仕方を学ぶ	病気の状態により、心の安定差に違いがあることが分かった。化学療法を受けている児童は、副作用として不眠、食欲不振、精神的な苦痛等があることを学んだ
E	ベッドメイキングをする	大学で学んだ方法より簡略化されていた。 同時に身の回りの整理が行われていた。
E ▲	病児にバイタルサインの測定を行い、子供の状態を把握する。	子どもの病気異常に対してのバイタルサインの関係は見られなかったが、測定中に、簡単な問診を行うことが出来た。
E	患児の状態から、精神状態を知る。	コミュニケーションの取り方を学ぶ。病棟のイベントでお祭りに参加したが、保護者と思いきりダーツを投げているところ等見ていて、精神的に苦痛を感じているなと思いました。
F	病院の環境・情報を把握する。	スタッフの役割によって、制服の色が違っている。 子どもへの配慮であるという。病棟の一日の流れを把握した。小児科なので様々な科の医師が来ていた。 担当するA児の情報を得る。

F	バイタルサインの測定で子供の様子を知る。	実際に子供の脈拍を測定した。戸惑うこともあったが、丁寧に指導いただき、素早く測定することが出来るようになった。
F	病棟保育士と子どもとの関わり	生活全般にかかわっていた。一緒に遊んだり、勉強をしたりしていた。学校との連携について聞けなかった。
F	子どもの生活補助を学ぶ	2歳児を中心に見学した。生活補助の仕方の中で、サポートの必要なことが良く理解できた。
F	看護師や子供の動きをみる	受け持ち患者数によって、処置、クスリの投薬状況などによって看護師さんの動きが違うことが分かった。 5日間で分かった子供の状態では病状の経過の良し悪しで変化すること、イベントがあると楽しいことがわかった。
G	小児病棟で苦痛や不安の緩和について学ぶ	入院する保護者用のビデオを見せてもらった。病気の知識だけでなく、入院の不安緩和に役立っていた、また、発熱などの苦痛に対して、氷枕などを使って苦痛緩和していた。
G	看護師さんの子どもへのかかわり方を学ぶ	入浴時足元からお湯をかけて、少しずつ慣らして、安心させていた。食事を嫌がる子には膝に抱っこして、視線を同じくして食べさせていた。処置をするときは必ず説明してから処置を行っていた。
G	看護師さんの一日の流れを見る。	チームリーダーは常に全体の動きを見て、指示を出しながら、ドクターや検査部からの指示等を確認しながら行動していた。病棟での一日の流れが分かった。
G	看護師さん同士の連携の取り方を学ぶ	病棟での引き継ぎ、他科への引き継ぎ、オペの情報の引き継ぎなど、細かく連携を取っているところも見る事が出来た。
G	苦痛や不安の緩和の仕方を学ぶ	術後の患者が発熱に心配していたが、術後の発熱について説明し、少しでも楽になるように氷枕などで対応していた。

▲ネガティブ表現

学生の順位については無作為抽出した。

表-3 参加体験実習事項

	小児科病棟	整形外科病棟
実	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎感染予防の為の手洗い—院内感染予防</li> <li>◎シーツ交換</li> <li>◎ベッドメイキング・ベッド移動</li> <li>◎環境整理・病室内清掃</li> <li>◎入院部屋の準備</li> <li>◎入浴介助・シャワー介助</li> <li>◎全身清拭</li> <li>◎おむつ交換</li> <li>◎オペ出し・オペ後引き取り（体調管理）</li> <li>◎検査送り・外来・レントゲン室</li> <li>◎バイタルサイン測定</li> <li>◎投薬管理・乳児の投薬方法</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎病室内清掃、ベッド環境整備</li> <li>◎シーツ交換</li> <li>◎ガーゼ交換・創部の観察</li> <li>◎検査送り・レントゲン室・外来</li> <li>◎ガーグル・ベース洗浄、片付け</li> <li>◎氷枕、アイスノン準備洗濯</li> <li>◎医療用具の洗浄片付け</li> <li>◎清拭準備</li> <li>◎術後の創傷観察</li> <li>◎清拭</li> <li>◎食事介助、食事摂取量の確認</li> <li>◎点滴の準備補助</li> <li>◎点滴交換補助</li> <li>◎転棟準備</li> <li>◎入院準備</li> <li>◎処置の記録カルテ記入</li> <li>△保護者へ連絡</li> </ul>
習	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎褥瘡予防の為の体位交換</li> <li>◎人工呼吸器装着児の体位交換（補助）</li> <li>◎氷枕の使い方</li> <li>◎創傷消毒の補助</li> <li>◎汚物・嘔吐物の処理</li> <li>◎尿検査</li> <li>◎川崎病児のリンパ節の触診体験</li> </ul>	
項	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎健康観察（S—主訴・A—アセスメント O—視診—表情、顔色）</li> <li>◎食事介助・配膳・おやつ配膳</li> <li>◎乳児のミルクづくり</li> </ul>	
目	<ul style="list-style-type: none"> <li>○病院保育室での病児との遊び</li> <li>○病棟内お祭り準備</li> <li>○不安や苦痛を抱えている病児の関わり</li> <li>○泣いている病児との関わり</li> <li>○病児との遊び・パズル等</li> </ul>	

実習内容を目標①看護技術の習得—◎ 目標②連携—△ 目標③関わり方—○で表示

表-4 見学実習事項

	小児科病棟	整形外科病棟
実	◎看護記録、入院のしおり	◎申し送り
	◎申し送り	◎病棟カンファレンス
	◎病棟カンファレンス	◎回診介助
	◎回診介助	◎術後処置の見学
	◎点滴介助	◎術後創処置の準備
	◎白血病患児の間診見学	◎褥瘡予防の方法見学
習	◎食物アレルギーの負荷試験	◎CPM（人工膝関節の持続的多動運動訓練）の見学
	◎清拭	△電子カルテの入力見学
	◎保冷剤の扱い方について	◎看護計画の見直し見学
	◎ベッド移動	◎服薬介助
	◎食事介助	◎チームリーダーの一日の流れ
項	◎輸血の準備	◎各種器具の消毒
	◎骨肉腫患者児のバルーンの取り扱い	○ナースコールの対応の仕方
	◎入退院指導・保護者への術後指導	○身体障害患者のトイレからのナースコール対応
	癌患者の検査結果の報告指導	
	◎術後処置の見学	◎包帯交換
目	◎シャワー介助	◎術後創部の観察と抜管
	△電子カルテの記入	
	○2歳児とのかかわり方・ふれあい	
	○病棟保育士さんの補助	
	△患者家族とのかかわり見学	
	◎鼻水・痰の吸引	

実習内容を目標①看護技術の習得－◎ 目標②連携－△ 目標③関わり方－○で表示

表-5 小児科・整形外科病棟実習で体験した疾患の種類

疾患名	人数	疾患名	人数	疾患名	人数
脳腫瘍	4	中耳炎	2	急性腎不全	2
扁桃腺炎	1	手足口病	1	停留精巣	1
扁桃腺肥大	1	RSウイルス	1	骨肉種	1
アデノイド	1	術後脳症	4	膀胱炎	1
川崎病	3	白血病	4	人工膝関節	1
莓舌	3	大腿骨骨折	1	術後創部の観察	3
食物アレルギー	3	口蓋裂	4		
ネフローゼ症候群	3	褥瘡	2		

日誌に記載のあったもののみ



表-6 実習を通しての学び（感想）

項	目	計
全 体 に つ い て の 感 想	○本科の外来実習より病棟実習の方が、学ぶことが多かった。	6
	○病棟実習では、医学的知識が求められることが多かったので、関係することでは、実習中に学び直した。	5
	○養護教諭の視点に立った指導が常に考えられていた。	7
	○養護教諭の仕事は楽しいねの視点を看護師さんが持っていてくれた。	2
	○病棟内では働いているナースの人間関係がよく見られた。	1
	▲回診は、特に小児科では、ついでにだけになりがちで、処置があまり良く見られなかった。	3
	○整形外科の病棟では、回診時、術後の処置などがよく見られ、創傷処置の仕方の学びになった。	4
	○5日間の病棟の継続した実習であったので、病児の経過観察をしながらの実習ができた。	7
	○整形外科では、スタッフ全体で、一人一人の患者さんを診ている様子が見られた。申し送り、カンファレンスなどをしながら連携がとられていた。	2
	○病院内の徹底した感染予防対策には驚かされた。	4
	○患児の5日間の表情など変化を観察していることに学びました。	7
	○本科での外来実習では気づけなかった、小児科病での保育士さんの存在は大きく、学びになりました。	7
	○小児科病棟での病児に不安を与えないための、声掛けや関わり方を具体的に学びました。	7
	▲本科で学んだ各種検査の実際は学べなかった。	2

○ポジティブ表現 ▲ネガティブ表現

図-2 自己評価

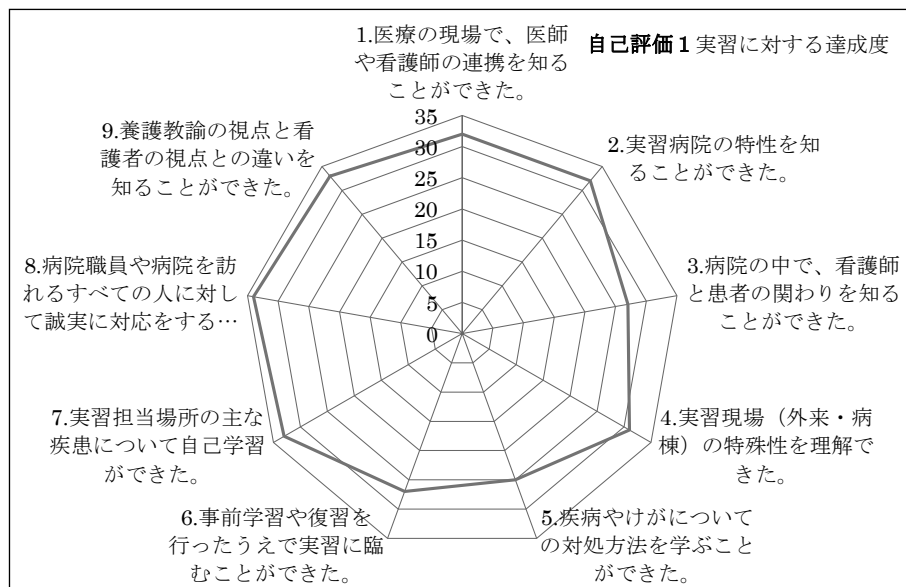


表-7 カンファレンスの記録

<p>テーマ1 小児病棟から学んだ学校感染症予防の在り方</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・手洗いうがいの励行ーもっと積極的に指導の必要性あり。特に教職員に。</li><li>・ハンドジェル、ペーパータオルの使用</li><li>・学校現場では「手洗いうがいは大切」というところで終わっている。 いつでも、せっけんや消毒液がある雰囲気を作っておく。</li><li>・マスクの使用を徹底する。</li><li>・ベッドの清潔さが大切。</li><li>・滅菌・除菌シートを学校でも使えないか。</li><li>・汚れたものの中央管理は病院ならでは。学校ではどうするか考えたい。</li><li>・児童に自己管理の徹底をはかる。</li></ul>
<p>テーマ2 バイタルサインの測定を通した子供とのかかわり方</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・測定前に、発達段階に応じた声掛けを行っていた。</li><li>・血圧測定は児童が落ち着いてから。</li><li>・脈拍測定のみでなく、心音もステイトで診るようにするとよい。</li><li>・血圧測定の前に説明をして安心感を与える、</li></ul>
<p>テーマ3 苦痛や不安を緩和するための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・オペだしの時の声掛け</li><li>・世間話でリラックス</li><li>・氷枕での工夫</li><li>・処置に対する DVD を子供・保護者に見せることで不安の緩和</li><li>・嘘はつかない</li><li>・こどもにもリスクやメリットを説明し、選択させる。子供にできる限り選ばせる。</li><li>・相手の意思を尊重する。</li><li>・声のトーンや口調に工夫。</li><li>・子供に心の準備をさせる時間を与える。</li><li>・何事も十分な説明をする。</li></ul>

処法を学ぶことができたが25点で最下位であった。

実習態度に対する自己評価では、ほとんど大差なく十分な評価をしているが、学生としての身だしなみと自己健康管理については全員最高評価であった。実習中私語なく質問ができたが32点で最下位であった。

## VI 考察

実習目標については、養護教諭のための保健・医療・福祉系の実習ハンドブック<sup>5)</sup>では、①人間理解②人々の発達発育課題や健康課題等の役割の理解③連携先としての場の理解④子供と子供の生活の場の理解⑤養護教諭として必要な基本的技能の習得とある。本専攻科特別臨床実習要綱<sup>3)</sup>から実習全体の目標を持たせたところ、看護技術を学び、救急看護能力を高めること。患児の苦痛や不安を緩和する方法を学ぶことを挙げている。全体目標のみでなく毎日の小目標を立て実習に臨むように指導したところ、病院実習指導者も、目標に沿った内容を提供するように工夫してくれていることもあって目標を達成していることが殆どで、小目標を立てさせることによって学びが深まっている。達成できなかったと記述しているものは4件で、①②バイタルサインと病気の関係のみをみることは出来なかった。③子供の訴えや背景を感じ取りたかったが、泣いてばかりで、分からないことばかりだった。④整形外科病棟では一日の大まかな流れは把握したが、細かい作業がありすぎて難しかった。と、一部の看護技術については困難を感じている。

実習で体験した事項では、大学で学んだ基礎看護技術（ベッドメイキング・バイタルサインの測定・全身清拭・創傷の手当て・健康観察等）を駆使して小児・整形外科病棟で体験実習をしている。見学実習については、医療介助・術後処置・輸血・点滴・CPM・病棟申し送り・電子カルテの入力等学校では直接必要ないが、病院での専門的看護師技術に触れている。

体験した病名では、学校の児童生徒に関わりのある病気を多数見てきている。また、その疾病について、調べ、記録を添付している数名の学生も見られた。

実習を通しての感想では、『看護指導者サイドに養護教諭になる学生としての視点を持って指導に当たってくれた』ことで、実習意欲が高まり、養護教諭になる者として自己肯定感が高められたようだ。また、病棟での実習であったことで、病児の継続した観察が出来たと述べている。

カンファレンスでは、常に病院実習で学んだ体験を生かして、どのようにして学校保健室で活動するかの視点に立って検討している。

自己評価では、けが等の対処法については学びが不

十分と感じている。

養護教諭に必要とされている救急処置能力は単に処置能力にとどまらず、傷病の重症度、緊急度を判断する能力が要求されている<sup>6)</sup>。一人一人が、自信を持った救急処置に繋げるには、まだまだ多くの体験学習が必要のようだ。

## VII 終わりに（今後の課題）

この調査の結果、大学での看護学の講義のみでは学び得ないたくさんの医学・看護学の知識、技術を学んでいることが示された。養護教諭にとって専門職としての機能を展開するための重要な一分野である。

実習期間を短縮したが、毎日の目標を持たせることで、看護指導者からの配慮も受けて、学びが深まることが分かった。これからの指導の重点としては、①大学内での基礎看護・救急処置技術指導の一層の充実を図ること②各自に毎日の目標を持たせ、問題意識をもって積極的な実習を進めること。指導体制としては①実習病院・実習指導者との打ち合わせで、大学として、養護教諭の職務等の説明も加えながら、その特性に合わせた実習の場の提供を依頼することが重要である。②精神福祉センターや発達障害支援センター等、保健室の多角的問題に対応するための実習の成果も検討に加え、全体として検証する必要がある。

## VIII 参考文献：引用文献

- 1) 養護教諭の免許制度（教育職員免許法第5条）
- 2) 養護教諭養成カリキュラム内容（教育職員免許法施行規制第9条、10条）
- 3) 帝京短期大学 専攻科、特別臨床実習要綱
- 4) 小倉学「養護教諭その専門性と機能」1971 東山書房
- 5) 中桐佐智子他「養護教諭のための保健・医療・福祉系実習ハンドブック」2012 東山書房
- 6) 杉浦守邦「救急養護学序説」1978 東山書房
- 7) 藤井寿美子他「養護教諭のための看護学」2009 大修館書店
- 8) 大原榮子他「養護教諭の専門性と学校看護の捉え方についての研究」2011 名古屋学芸大学短期大学部紀要
- 9) 佐藤秀子他「養護教諭養成課程における看護臨床実習の意義」2007関西女子短期大学紀要
- 10) 秋山昭代「養護教諭養成課程における臨床実習」第一報 千葉大学教育学部紀要

